ワイズ文庫蔵

ヒバクシャと語り部

竹内　隆（東京西クラブ）

六十八年目の広島原爆忌が近づいた。今年は図らずもヒバクシャの一人として迎える。昨年六月九日、スティーブン・リーパー氏（広島平和文化センター理事長）の講演会が西荻窪の杉並区勤労福祉会館で開かれることを人づてに聞いて参加した。終わって懇親会の席上、主催者の杉並光友会（原爆被爆者の会）の会長さんが近づいて来て「貴方は二号被爆者ですよ。すぐ申請して会員になって下さい。同期の〇〇さんは会員で活動していますよ」と初対面ながら心優しい暖かい声をかけて下さった。

聞けば、昭和二十年八月二十日（広島原爆投下後二週間）までに広島市に入った人は「入市被爆者」として「被爆者援護法」によって被爆者健康手帳が受けられると言う。終戦の年八月六日、江田島の海軍兵学校の最上級生で、課業中の八時十五分に受けた閃光と激震と北の空十六キロメートルのキノコ雲は生涯忘れることは出来ない。命令により海路広島を経て帰郷した。十九歳になる直前だった。

この年になっての躊躇もあったが、会長さんの熱意と、期友の証人引き受けのお陰でとんとん拍子に進んで、平成二十四年七月六日付で晴れて被爆者健康手帳が交付された。

今年の五月二十九日付けの郵便で、ＮＨＫ広島放送局から「ヒバクシャからの手紙」への協力の依頼があった。四種類の内容のうち私は「③原爆を知らない若い人達へ」の投稿文を送った。六月二十三日、早速返事が来て、貴方の手紙はウェブサイトで全国に流しますが名前を公表しても宜しいですかとの丁寧な電話だった。

ヒバクシャは、「悪魔の兵器」と言われる原爆＝核兵器の使用によって人生を変えさせられ、周囲の差別の中で、平均年齢七十七歳超まで生き抜いた今、語り部として、辛い体験をありのまま語り伝え、核兵器の廃絶と世界の平和に貢献したいとの心情を訴えている。七十歳以上でなければ、原爆を知らない世代となる今、私もヒバクシャとして生きる限りの核廃絶・世界平和の訴えを、「語り部」として続ける覚悟である。

（東京西クラブブリテン・二〇一三年七月号）